

PROGRAM

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

Franz Joseph Haydn (1732-1809)

弦楽四重奏曲 第 67 番 ヘ長調 作品 77
「ロプコヴィッツ四重奏曲」第 2 番 Hob. III-82

String Quartet No.67 in F major, Op.77

“Lobkowitz Quartet” No.2 Hob. III-82

- I Allegro moderato
- II Menuet: Presto
- III Andante
- IV Finale: Vivace assai

サミュエル・バーバー

Samuel Barber (1910-1981)

弦楽のためのアダージョ 作品 11

Adagio for Strings, Op.11

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791)

弦楽四重奏曲 第 17 番 変ロ長調 K.458 「狩」
(ハイドン・セット 第 4 番)

String Quartet No.17 in B flat major, K.458 “Hunt”

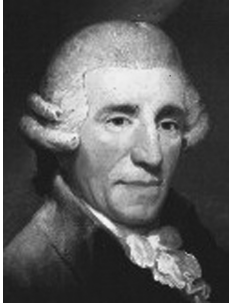
(Haydn Set No.4)

- I Allegro vivace assai
- II Menuetto. Moderato-Trio
- III Adagio
- IV Allegro assai

PROGRAM NOTES

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン
(1732-1809)

弦楽四重奏曲 第 67 番 ヘ長調 作品 77
「ロプコヴィッツ四重奏曲」第 2 番 Hob. III-82



古典派を代表するオーストリアの作曲家。幼少より音楽に才能を発揮し、8歳でウィーンの聖歌隊の一員となった。独学で作曲を学び、1761年にエステルハーゼ家の副楽長、1766年には楽長となり、以降30年近くエステルハーゼ家に仕えた。温厚で快活な人間性から「パパ・ハイドン」の愛称で多くの人から慕われた。数多くの交響曲や弦楽四重奏曲を作曲したことから「交響曲の父」、「弦楽四重奏曲の父」と呼ばれる。

「ロプコヴィッツ四重奏曲」は、ウィーンの裕福な音楽愛好家、ロプコヴィッツ侯爵の委嘱で1799年に作曲された。本作はその第2番で、「雲がゆくまで待とう」という副題がついている。ロプコヴィッツは、一時期ハイドンの弟子であったベートーヴェンのパトロンでもあり、ハイドンと同じ時期、ベートーヴェンにも弦楽四重奏曲を委嘱している。ベートーヴェンは本作の一年後に弦楽四重奏曲作品18「ロプコヴィッツ」を献呈している。当時、弦楽四重奏曲は6曲セットで出版されるのが通例であったが、ハイドンは健康状態の悪化と、大作オラトリオ「四季」の作曲に専念するため、第2番で中断した。本作はハイドン最後の弦楽四重奏曲である。

サミュエル・バーバー
(1910-1981)

弦楽のためのアダージョ 作品 11



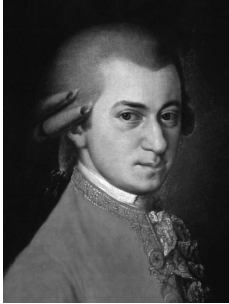
米国ペンシルヴェニア州に生まれる。7歳で作曲、10歳でオペラを試作するなど、幼少より才能を示した。ピアニストの母の他、母の姉で著名なオペラ歌手のルイズ・ホーマー、その夫で作曲家のシドニーからの影響も大きかったといわれる。14歳よりカーティス音楽院でピアノ、作曲、声楽、指揮を学び、首席で卒業した。管弦楽曲の他、交響曲や協奏曲、歌劇やピアノ曲、歌曲等も数多く作曲し、ピューリッツァー賞をはじめ、様々な賞を受賞している。バーバーは、豊かで華麗な旋律を作風とし、現代アメリカの作曲家の中で高い地位を築いている。

バーバーは、イタリア留学中の1936年、ローマの詩人ウエルギリウスの「農耕詩」に感銘を受け、弦楽四重奏曲1番短調を作曲した。本作はその第2楽章で、深い叙情性と情熱をたたえている。1938年、弦楽オーケストラ用に編曲され、「弦楽のためのアダージョ」として広く知られるようになる。以来、バーバー作の弦楽四重奏曲、弦楽オーケストラ曲の中で、最も多く演奏される代表作となった。

「弦楽のためのアダージョ」は、ルーズベルト元米国大統領の訃報を伝える際や、ケネディ元米国大統領の葬儀、最近では米国同時多発テロ慰霊祭など、国家的哀悼の意を表す機会に使用されてきた。今夜は、阪神淡路大震災で被災された方、ご遺族の皆様への鎮魂の祈りを込めて演奏される。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
(1756-1791)

弦楽四重奏曲 第 17 番 変ロ長調 K.458「狩」
(ハイドン・セット 第 4 番)



オーストリアのザルツブルクに生まれる。宮廷作曲家でヴァイオリニストの父、レオポルトに才能を見出され、4歳より音楽教育を受ける。5歳で初めて作曲した。幼年期の大半を家族とヨーロッパ各地を演奏旅行し、宮廷や貴族の前でその神童ぶりを披露した。モーツァルトは、弦楽器のための室内楽曲やピアノ協奏曲、オペラをはじめ、当時のあらゆる楽曲形式に才能を発揮し、生涯に700曲以上を作曲した。ハイドン、ベートーヴェンと並び、ウィーン古典派三大巨匠と称されている。

本作は、ハイドンに捧げられた「ハイドン・セット」の第4曲目(全6曲)。軽快な曲風で、曲の始まりが狩の角笛を思わせることから「狩」の愛称が付いている。「ハイドン・セット」は、古典派様式を確立したハイドンの「ロシア四重奏曲」(1781)に深く感動したモーツァルトが、約10年ぶりに手がけた弦楽四重奏曲集で、完成まで2年余りを要した力作である。「わが親愛なる友」で始まる献辞は、モーツァルトのハイドンへの敬愛に満ち、音楽史上、最も美しい文章といわれている。1785年、モーツァルトはハイドンをウィーンの自宅に招き、第1ヴァイオリンを父レオポルト、第2ヴァイオリンを彼自身の演奏で披露した。ハイドンは深く感銘を受け、モーツァルトの才能を大絶賛した。



Photo by S. Yokoyama

ストラディヴァリウス
「パガニーニ・クワルテット」
Stradivarius "Paganini Quartet"

1680年製 ヴァイオリン 「パガニーニ」
1727年製 ヴァイオリン 「パガニーニ」
1731年製 ヴィオラ 「パガニーニ」
1736年製 チェロ 「パガニーニ」

アントニオ・ストラディヴァリ(1644-1737)によるクワルテットのうち、世界に存在が知られているのは6セットと言われ、このクワルテットはその1つである。19世紀におけるイタリアの卓越したヴァイオリンの巨匠ニコロ・パガニーニ(1782-1840)が、弦楽四重奏の演奏に相応しい4挺を収集し演奏していたことからこの名前が付けられた。日本音楽財団は、1994年にアメリカ・ワシントンD.C.のコーコラン美術館からこのクワルテットを購入し、4挺を常にセットとして、弦楽四重奏団に貸与している。

演奏者インタビュー

取材：神戸新聞文化生活部記者 藤嶋 亨

— 今回は、阪神・淡路大震災のチャリティコンサートと銘打った公演です。公演に向けて、メンバーの皆さんの思いを聞かせてください。また、当日のプログラムにはバーバーの「弦楽のためのアダージョ」が入っています。この曲を演奏する意味についても伺いたいと思います。

池田菊衛 偶然にも阪神・淡路大震災が起こった直後の1月27日に東京クワルテットは演奏会のため大阪入りしました。救援物資を積んだトラックが何台も神戸に向かうのを実際に見て、被災された皆さんが一日も早く平穏な日常を取り戻される事を強く願ったのを憶えています。震災復興のチャリティコンサートに出演するのは大震災の翌年1月に淡路島で開かれたコンサートに引き続き2回目になりますが、神戸でも是非演奏したいと常々思っていました。「弦楽のためのアダージョ」はアメリカではよく鎮魂のために演奏されます。あの日の出来事を今一度思い出すとともに、見事に蘇った神戸の街と復興に向けて力を合わせた市民の皆さんの勇気を講えて心を込めて演奏したいと思っています。

— 1970年代に演奏を披露して以来、久々の神戸公演ですが、当時の公演で印象に残っていることなどがあれば、教えてください。

磯村和英 1979年に、兵庫県民小劇場で弾かせて頂いた事は、はっきりと覚えています。小寺さんという、大変熱意のある音楽愛好家がいらして、その方が中心になり、とても良いコンサートシリーズがあったように、記憶しております。また、兵庫県民小劇場の音響は素晴らしく、室内楽の演奏に相応しいホールでした。

— 皆さんが使用しているストラディヴァリウスについてですが、当日、この楽器の音色を楽しみにして会場に足を運ばれるお客さんも多いと思います。楽器の特長や、聴きどころなど、鑑賞の助けになるような情報があれば教えてください。

池田 我々が使っている楽器はパガニーニ・クワルテットと呼ばれるストラディヴァリ製作の4挺の弦楽器のセットですが、日本音楽財団のご厚意により1995年から使わせていただいています。財団が米・ワシントンのコーコラン美術館から購入する1994年まではあまり演奏に使われていなかった様で、我々が弾

き始めた当初はあまり音が出ませんでした。（これを我々は「楽器が寝ている」と言います。）それから15年以上経って練習で毎日弾き、演奏会で年間平均80回も弾いているうちにどんどん音が出るようになり、今や楽器本来の輝きを完全に取り戻していると言えると思います。ストラディヴァリは当時の人としては大変長生きで、1737年に93歳で亡くなるまでに1,000挺を超える弦楽器を製作したのですが、パガニーニ・クワルテットを構成する4挺のうち一番古い1680年製ヴァイオリンは36歳の時の作品であり、一番新しい1736年製チェロとの間には56年もの歳月の隔たりがあります。しかもこのセットは元々製作者と一緒に演奏されることを念頭において作られた楽器ではないので、一見、同じ製作者が作った楽器であっても一緒に演奏するには無理があると思われるかもしれませんが、我々が使っているセットにはそうした違和感が全くありません。それどころか、個々の弦楽器の個性が時には互いを引き立てあい、またある時はまるで大きな一つの弦楽器の様に音が溶け合うのを実際に演奏していてよく感じます。ストラディヴァリ独特の力強く美しい音色と共に、四重奏ならではの楽器の響き合いを楽しんでいただけたら幸いです。

— 当日のプログラムには、ハイドンとモーツァルトの弦楽四重奏曲が選曲されています。基本的な質問で恐縮ですが、多くの作曲家が書き残している弦楽四重奏曲の魅力とは何でしょうか？ また、その魅力を東京クワルテットでは、どうお客さんに伝えようとしているか、グループのこだわりや流儀があれば教えてください。

磯村 弦楽四重奏は、合奏音楽の基本であり、室内楽の本質的な魅力を備えた演奏形態です。弦楽器四本という、小規模でシンプルな形態でありながら、十分に豊かで、深い音楽的表現が出来る、というところに強くひかれます。

そんな弦楽四重奏のために、ハイドンは80以上の曲を書き、弦楽四重奏曲の、完成されたスタイルを築きました。

モーツァルト、そして後にベートーヴェンはそれらをもとに、より芸術性の高いものを作ってくれました。我々の役目は、それらの古今の名作に血を通わせ、その作品の真髄を聴き手の心に伝える事、だと思っています。

東京クワルテット Tokyo String Quartet

ストラディヴァリウス
「パガニーニ・クワルテット」

マーティン・ビーヴァー
池田 菊衛
磯村 和英
クライヴ・グリーンズミス

1727 年製 ヴァイオリン
1680 年製 ヴァイオリン
1731 年製 ヴィオラ
1736 年製 チェロ



©Henry J. Fair

東京クワルテットは、桐朋学園で斎藤秀雄の薫陶を受けたヴァイオリンの原田幸一郎、名倉淑子、ヴィオラの磯村和英、チェロの原田禎夫の4人により、1969年留学先のジュリアード音楽院で結成された。その後、パサディナ（アメリカ）のコールマン・オーディションや、難関として知られるミュンヘン国際音楽コンクール、ヤング・コン

サート・アーティスト国際オーディション（アメリカ）などで次々と優勝。以来、40余年を経てメンバー交代をしながらも、世界最高峰の弦楽四重奏団として人々を魅了し続けている。現在のメンバーになったのは2002年から。若手演奏家の育成にも熱心に取り組み、1976年以降、レジデンス・クワルテットとしてイエール大学音楽院にて教鞭を執る他、夏は名門ノーフォーク室内楽音楽祭など、北米、ヨーロッパ、アジアで定期的にマスタークラスを開催している。ドイツ・グラモフォンとの専属契約により、世界の主要なクワルテットの一つとして確固たる地位を確立。その後、BMG/RCA ピクチャー・レッド・シール、EMI、ハルモニア・ムンディ、ピドルフ・レコーディングスなどから、数多くの名盤を生み出している。2010年、ハルモニア・ムンディよりベートーヴェンの後期弦楽四重奏曲のCDをリリースし、フランスの音楽専門誌“Diapason”より最高賞“Diapason D'or”を受賞した。

1995年より日本音楽財団保有のストラディヴァリウス「パガニーニ・クワルテット」を使用している。

東京クワルテットは今回のチャリティコンサートの趣旨に賛同し、無償で出演する。

マーティン・ビーヴァー（第1ヴァイオリン） Martin Beaver



2002年より参加。トロント王立音楽院卒業後、トロント弦楽四重奏団、トリスケリオン創立メンバーになる。インディアナポリス、モントリオールの国際ヴァイオリン・コンクール優勝、ベルギー・エリザベート王妃国際音楽コンクールで2位を受賞。2009年、同コンクール審査員を務める。ソリストとしてサンフランシスコ交響楽団、ベルギー王立管弦楽団等と共演。現在、ニューヨーク大学のスタインハートスクールでも教鞭を執る。

池田菊衛（第2ヴァイオリン）



1974年より参加。桐朋学園でヴァイオリンを鷺見三郎、ジョセフ・ギンゴルド、室内楽を斎藤秀雄に師事。1971年に渡米し、ジュリアード音楽院でドロシー・ディレイ、ジュリアード弦楽四重奏団に師事した。日本音楽コンクール、ワシントン弦楽器コンクール、ポルトガルのヴィアナ・ダ・モッタ国際コンクールに入賞。読売日本交響楽団、東京都交響楽団、東京交響楽団等と共演。

磯村和英（ヴィオラ）



東京クワルテット創立メンバー。桐朋学園高校でジャン・イスナール、小林健次、斎藤秀雄に師事。渡米後、ナッシュビル交響楽団の副コンサートマスターに就任。ジュリアード音楽院でヴァイオリン、ヴィオラ、室内楽を学ぶ。ミュージック・マスターズ / ミュージック・ヘリテージ・ソサイエティよりソロCDをリリース。2010年、庄司沙矢香、佐藤俊介、石坂団十郎、小菅優と水戸芸術館専属楽団「新ダヴィッド同盟」を結成。

クライヴ・グリーンズミス（チェロ） Clive Greensmith



1999年より参加。英国ロイヤル・ノーザンカレッジ卒業後、ロンドンのロイヤル・フィルハーモニック管弦楽団で首席チェリストを務める傍ら、フィルハーモニア管弦楽団やイギリス室内管弦楽団の客演首席チェリストとしても活躍。セルジオ・ロレンジ・コンクール優勝。第一回プレミオ・ストラディヴァリ2位。ピドルフ・レコーディングスからソロCDをリリース。現在マンハッタン音楽院でも教鞭を執る。

認定 NPO 法人

阪神淡路大震災「1.17 希望の灯り」

理事長 上西 勇

私たちは、あの「阪神淡路大震災」で一瞬にして多くの命、そして仕事を奪われました。しかし、沢山の方々の励まし、出会い、助け合いを通じて、絆の大切さに気付きました。

NPO 法人設立から 10 年、私たちの活動は、絆をむすび、つなぐ、活動でもありました。阪神淡路大震災以降も、自然災害・事件・事故が続発しています。改めて「たった 1 秒先が予知できない人間の限界」を痛感しています。JR 福知山線の痛ましい事故も、朝、「行ってきます」と、元気な声をかけて出かけて行った方が次の瞬間に帰らぬ人となってしまったのです……

日常生活の中には、いつも「まさか」が潜んでいます。「いつ・どこで・何が起るか分からない」からこそ、日常生活の中でみんなお互いに思いやる心を育てていかなければならないのです。そのことこそが、震災が私たちに教えてくれたことです。震災で気付いた「命の大切さ」を一人でも多くの方々に、そして次の世代に伝えていく事が生き残った我々の使命であると決意し、活動を広めてまいります。

主な活動内容

- ①「震災モニュメントマップ」を CD 化し、各地の学校に配布
- ②「震災モニュメント交流ウォーク」の開催
- ③「阪神淡路大震災 1.17 のつどい」の開催
震災で亡くなった方を追悼慰霊し、震災で生まれた絆を支えあう心を次世代に語り継ぐ。
- ④「希望の灯り」の分灯
震災直後、被災者は焚火や懐中電灯の灯りに癒された。その想いから 2000 年 1 月 17 日「希望の灯り」のモニュメントが建立され、その灯りを全国の行事に分灯している。
- ⑤「慰霊と復興のモニュメント」銘板の掲示とつどい
被災者遺族の要望により、神戸市以外の震災死者やその他震災関連死者の名前を新たに銘板に提示し、つどいを開催している。
- ⑥ 震災体験学習の受け入れ
- ⑦「はるかひまわり」の種の配布と、ひまわり絵画展開催
震災で亡くなった加藤はるかちゃん（当時小 6）がペットのオウムに与えていたひまわりの種が、震災後、瓦礫の中から沢山のひまわりを咲かせた。これが「はるかひまわり」と名付けられ、全国にひまわりの種が広がっている。

日本音楽財団 NIPPON MUSIC FOUNDATION

日本音楽財団は、アントニオ・ストラディヴァリ等によって製作された世界最高クラスの弦楽器を 21 挺（ストラディヴァリウス・ヴァイオリン 15 挺、チェロ 3 挺、ヴィオラ 1 挺、ガールネリ・デル・ジェス・ヴァイオリン 2 挺）を保有しており、国籍を問わず一流の演奏家や若手有望演奏家に無償で貸与しています。

楽器貸与に係わる基本方針並びに貸与者（演奏家）は、楽器貸与委員会で決定されます。委員会は世界的な指揮者であるロリン・マゼール氏を委員長として、欧・米・アジアの代表の 9 名により構成されています。

当財団が保有する世界の文化遺産ともいわれる名器の保守保全に関しては、次世代に継承するための管理者としての大きな責務を負っていることを自覚し、最大の努力を払っています。楽器の保守保全及び貸与事業は、日本の音楽分野における国際貢献として世界の音楽界から高く評価されています。

日本音楽財団では楽器貸与者の協力を得て、貸与者と貸与楽器による演奏会を、日本国内と海外で毎年開催し、名器の音色に触れる機会を提供しています。

2007 年からは、特に日本国内の地方都市における演奏会に重点を置き、ストラディヴァリウスやデル・ジェスとその貸与者によるチャリティコンサートを開催しており、その収益金は開催地の音楽振興・福祉等のために使われております。今回のチャリティコンサートもその一環となります。

日本音楽財団の事業は、日本財団の全面的なご支援により実施されています。

<http://www.nmf.or.jp>

日本財団は この公演を始め、 3つの分野で さまざまなサポートをしています。

日本財団は、ボートレースの売上を財源に
人々のよりよい暮らしを支える活動を推進しています。



社会福祉・教育・文化などの活動への支援



海や船にかかわる活動への支援



海外における人道活動や人材育成への支援



日本財団 で 検索



(財)神戸市民文化振興財団
〒650-0017 神戸市中央区楠町4丁目2-2
Tel. 078-351-3535 Fax. 078-351-3121
<http://www.kobe-bunka.jp>

神戸新聞社
〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7
Tel. 078-362-7100
<http://www.kobe-np.co.jp/>

(財)日本音楽財団
〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2
Tel. 03-6229-5566 Fax. 03-6229-5570
<http://www.nmf.or.jp>

日本財団
〒107-8404 東京都港区赤坂1-2-2
Tel. 03-6229-5111 Fax. 03-6229-5110
<http://www.nippon-foundation.or.jp>